

# 利用上の注意

本編は、平成 21 年 11 月 1 日現在で実施した「平成 21 年特定サービス産業実態調査」のうち、**興行場、興行団**(日本標準産業分類小分類項目 802)の調査結果について取りまとめたものである。

## I. 調査の概要

### 1. 調査の目的

特定サービス産業実態調査は、サービス産業の実態を明らかにし、サービス産業に関する施策の基礎資料を得ることを目的とする。

### 2. 調査の根拠

特定サービス産業実態調査は、我が国サービス産業の活動の実態と事業経営の現状を明らかにし、サービス産業に関する施策の基礎資料を得ることを目的に、統計法(平成 19 年法律第 53 号)に基づく基幹統計調査として、特定サービス産業実態調査規則(昭和 49 年通商産業省令第 67 号)によって実施される。

なお、特定サービス産業実態調査規則、調査票様式及び同記入注意を参考として掲載している。

### 3. 調査の期日

平成 21 年特定サービス産業実態調査は、平成 21 年 11 月 1 日現在で実施した。

なお、年間売上高等調査事項の調査対象期間は、原則、平成 20 年 11 月 1 日から平成 21 年 10 月 31 日までの 1 年間である。

### 4. 調査の範囲

特定サービス産業実態調査の範囲は、日本標準産業分類(平成 21 年総務省告示第 175 号)に掲げる「大分類H—情報通信業」、「大分類K—金融・保険業」、「大分類O—教育、学習支援業」及び「大分類Q—サービス業(他に分類されないもの)」に属する小分類のうち、主として経済産業省所管の小分類である。平成 21 年は、次に掲げる 28 業種の小分類について当該業務(事業)を主業として営む事業所(一部業種は企業)を対象に調査を行った。

#### 平成 21 年 特定サービス産業実態調査の調査業種及び調査対象の範囲

##### (1) 継続調査業種(21 業種)

調査業種	調査対象の範囲
ソフトウェア業	日本標準産業分類に掲げる小分類 391—ソフトウェア業に属する業務を主業として営む事業所
情報処理・提供サービス業	日本標準産業分類に掲げる小分類 392—情報処理・提供サービス業に属する業務を主業として営む事業所
インターネット附随サービス業	日本標準産業分類に掲げる小分類 401—インターネット附随サービス業に属する業務を主業として営む事業所
映像情報制作・配給業	日本標準産業分類に掲げる小分類 411—映像情報制作・配給業に属する業務を主業として営む企業
音声情報制作業	日本標準産業分類に掲げる小分類 412—音声情報制作業に属する業務を主業として営む企業

新聞業	日本標準産業分類に掲げる小分類 413－新聞業に属する業務を主業として営む企業
出版業	日本標準産業分類に掲げる小分類 414－出版業に属する業務を主業として営む企業
映像・音声・文字情報制作に附帯するサービス業	日本標準産業分類に掲げる小分類 416－映像・音声・文字情報制作に附帯するサービス業に属する業務を主業として営む企業
クレジットカード業、割賦金融業	日本標準産業分類に掲げる小分類 643－クレジットカード業、割賦金融業に属する業務を主業として営む企業
各種物品賃貸業	日本標準産業分類に掲げる小分類 701－各種物品賃貸業に属する業務を主業として営む事業所
産業用機械器具賃貸業	日本標準産業分類に掲げる小分類 702－産業用機械器具賃貸業に属する業務を主業として営む事業所
事務用機械器具賃貸業	日本標準産業分類に掲げる小分類 703－事務用機械器具賃貸業に属する業務を主業として営む事業所
自動車賃貸業	日本標準産業分類に掲げる小分類 704－自動車賃貸業に属する業務を主業として営む事業所
スポーツ・娯楽用品賃貸業	日本標準産業分類に掲げる小分類 705－スポーツ・娯楽用品賃貸業に属する業務を主業として営む事業所
その他の物品賃貸業	日本標準産業分類に掲げる小分類 709－その他の物品賃貸業に属する業務を主業として営む事業所
デザイン業	日本標準産業分類に掲げる小分類 726－デザイン業に属する業務を主業として営む事業所
広告業	日本標準産業分類に掲げる小分類 731－広告業に属する業務を主業として営む事業所
機械設計業	日本標準産業分類に掲げる小分類 743－機械設計業に属する業務を主業として営む事業所
計量証明業	日本標準産業分類に掲げる小分類 745－計量証明業に属する業務を主業として営む事業所
機械修理業	日本標準産業分類に掲げる小分類 901－機械修理業(電気機械器具を除く)に属する業務を主業として営む事業所
電気機械器具修理業	日本標準産業分類に掲げる小分類 902－電気機械修理業に属する業務を主業として営む事業所

(2) 平成 21 年新規調査業種(7 業種)

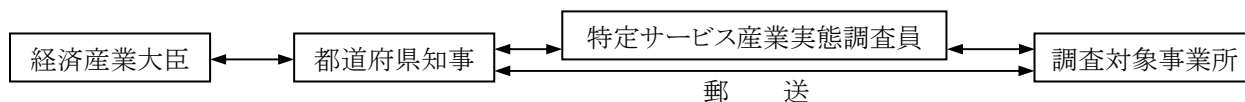
調査業種	調査対象の範囲
冠婚葬祭業	日本標準産業分類に掲げる小分類 796－冠婚葬祭業に属する業務を主業として営む事業所
映画館	日本標準産業分類に掲げる小分類 801－映画館に属する業務を主業として営む事業所
興行場，興行団	日本標準産業分類に掲げる小分類 802－興行場(別掲を除く)，興行団に属する業務を主業として営む事業所
スポーツ施設提供業	日本標準産業分類に掲げる小分類 804－スポーツ施設提供業に属する業務を主業として営む事業所
公園，遊園地・テーマパーク	日本標準産業分類に掲げる小分類 805－公園，遊園地に属する業務を主業として営む事業所
学習塾	日本標準産業分類に掲げる小分類 823－学習塾に属する業務を主業として営む事業所
教養・技能教授業	日本標準産業分類に掲げる小分類 824－教養・技能教授業に属する業務を主業として営む事業所

## 5. 調査方法

- (1) 都道府県知事が任命した特定サービス産業実態調査員又は郵送により、調査票の配布及び取集を行う方法。
- (2) 経済産業大臣が対象事業所を有する企業本社へ対象となった傘下事業所の調査票を郵送により配布及び取集を行う「①経済産業省一括調査」及び経済産業省が調査を委託した特定サービス産業実態調査実施事務局が郵送により配布及び取集を行う「②経済産業省直轄調査」による方法。

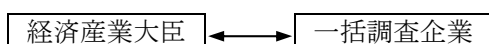
## 6. 調査経路

- (1) 都道府県経由の調査



- (2) 経済産業省調査

- ① 経済産業省一括調査



- ② 経済産業省直轄調査



## 7. 調査票の種類及び調査内容

平成 21 年調査は、19 種類の調査票(①「ソフトウェア業、情報処理・提供サービス業、インターネット附随サービス業調査票」、②「映像情報制作・配給業調査票」、③「音声情報制作業調査票」、④「新聞業調査票」、⑤「出版業調査票」、⑥「映像・音声・文字情報制作に附帯するサービス業調査票」、⑦「クレジットカード業、割賦金融業調査票」、⑧「各種物品賃貸業、産業用機械器具賃貸業、事務用機械器具賃貸業、自動車賃貸業、スポーツ・娯楽用品賃貸業、その他の物品賃貸業調査票」、⑨「デザイン業、機械設計業調査票」、⑩「広告業調査票」、⑪「計量証明業調査票」、⑫「機械修理業、電気機械器具修理業調査票」、⑬「冠婚葬祭業調査票」、⑭「映画館調査票」、⑮「興行場(別掲を除く)、興行団調査票」、⑯「スポーツ施設提供業調査票」、⑰「公園、遊園地・テーマパーク調査票」、⑱「学習塾調査票」、⑲「教養・技能教授業調査票」)を用いて、経営組織、従業員数、年間売上高及び営業費用等の調査を行った。

また、標本調査業種(「8. 標本設計及び抽出方法」の(2)を参照)については、事業従事者数(又は常用雇用者数)が 4 人以下の事業所は調査項目を簡素化した簡易票で調査を行った。

## 8. 標本設計及び抽出方法

- (1) 母集団名簿

平成 18 年事業所・企業統計調査名簿を用いつつ、特定サービス産業実態調査から得られる最新情報を反映した(廃業、主業変更等)。

- (2) 標本設計を行う業種の選定

調査客体への負担軽減、調査資源の効率化の観点から、28 業種のすべてについて、標本設計を行うこととするが、母集団数が 1,000 に満たない業種については、全数調査と設定する。

### 【全数調査とする業種(7業種)】

事務用機械器具賃貸業、クレジットカード業、割賦金融業、計量証明業、音声情報制作業、スポーツ・娯楽用品賃貸業、映画館、公園、遊園地・テーマパーク

- (3) 抽出方法

- ① 層化及び抽出の考え方

業種別・事業従事者規模別・都道府県別に層化抽出する。なお、企業単位の業種については常用雇用者規模別とする。

基準変数は売上高又は事業従事者とする。なお、母集団名簿である平成18年事業所・企業統計調査では売上高が把握されていないことから、過去の特定サービス産業実態調査などを用いて設計を行う。

## ②配分方法

全国計の業種毎に基準変数に対する標準誤差率が 2.0%以下になるよう標本数を計算。この標本数を事業従事者別にネイマン配分した後、都道府県別に比例配分する。

層ごとに抽出率が 50%を超える層にあつては、悉皆層と設定する。この場合にあつて、各業種の 100 人以上の層は抽出率に依存することなく悉皆層と設定(中小企業基本法の考え方を踏まえて設定)。

その後、抽出層の標本数を再計算する。

セル毎の最低標本数を「2」と設定し、標本数を追加する。

## 【層の区分】

事業従事者規模別の層は以下の区分とする。

- 1; 4 人以下、2; 5 人～9 人、3; 10 人～29 人、4; 30 人～49 人、5; 50 人～99 人、  
6; 100 人～299 人、7; 300 人～499 人、8; 500 人以上

※業種によっては、300 人以上を1つの層と設定。

## (4) 都道府県別の標準誤差率の改善

都道府県毎に基準変数に対する標準誤差率が 20%以内になるよう標本数を追加。業種別・事業従事者規模別・都道府県別に、事業所数により比例配分する。

## (5) 回収率を勘案した標本数の設定

過去の都道府県別・回収率を勘案し、抽出層における標本数とする。

## (6) 希望する都道府県には(5)に加えて標本数の追加を行った。

## (7) 標準誤差率は、次の式による。

$$\text{標準誤差}^2 = \sum_{i=1}^L \left\{ \frac{\text{標準偏差}^2}{\text{標本数}i} \right\} \times \left\{ \frac{(\text{母集団数}i - \text{標本数}i)}{(\text{母集団数}i - 1)} \right\} \times \left\{ \frac{\text{母集団数}i^2}{\text{母集団数}^2} \right\}$$

標準誤差率 = 標準誤差 / 平均

標準偏差  $i$  : 第  $i$  層の売上高(※)の標準偏差      平均 : 売上高(※)の平均

抽出数  $i$  : 第  $i$  層の標本数      母集団数  $i$  : 第  $i$  層の母集団数

$L$  : 層の総数

※業種毎に平成 19 年特定サービス産業実態調査、平成 17 年同調査、平成 16 年サービス業基本調査のうち最新の調査結果を利用。

## 9. 推計方法

### ・標本調査業種

標本調査業種の母集団推計は、調査結果を基に事業従事者規模別・都道府県別の層ごとに以下により行った。

## (1) 調査結果に基づく抽出率の設定

- ① 母集団数は、抽出時の母集団に調査時の廃業、対象外等を反映した数による。
- ② 有効回答数は、集計事業所数である。
- ③ 各層(事前の層)の抽出率の計算

$$\text{各層の抽出率} = \frac{\text{当該層の有効回答数}}{\text{当該層の母集団数}}$$

## (2) 個票の拡大推計(事前の層)

個票の拡大推計は、各個票(有効回答)の標本抽出時の層による。

したがって、調査の結果、業種毎、事業従事者模区分が移動した場合でも、標本抽出時の産業小分類・従業者規模区分(事前の層)で拡大推計を行った。

各個票の拡大推計値 = 1 / 当該層の抽出率 × 当該層の個票データ

### ・全数調査業種

全数調査業種の未回収事業所の補完は、各調査事項の事業従事者規模別・都道府県別の平均値(又は全国平均値)により行った。

## 10. 調査結果の概要

### (1) 調査の回答状況

調査業種	標本数	回答数	回答率	有効回答数	有効回答率
			(%)		(%)
興行場, 興行団	774	588	76.0	544	70.3

(注) 標本数、回答数、有効回答数は、廃業、転業及び休業事業所(企業)を含まない。

### (2) 調査結果の評価

#### ① 評価方法

調査結果の評価は、売上高(事業所の年間売上高又は、企業全体の年間売上高)の達成精度(標準誤差率)を基に行った。

なお、売上高の標準誤差率は、次の式により算出した。

$$\text{標準誤差}^2 = \left\{ \sum_{i=1}^L \left( \frac{\text{標準偏差}^2_i}{\text{標本数}_i} \right) \times \text{母集団数}_i \times (\text{母集団数}_i - \text{標本数}_i) \right\} / \text{母集団数}^2$$

$$\text{標準誤差率} = \text{標準誤差} / \text{平均}$$

標準偏差<sub>i</sub> : 第i層の売上高の標準偏差

平均 : 売上高の平均

抽出数<sub>i</sub> : 第i層の標本数

母集団数<sub>i</sub> : 第i層の母集団数

L : 層の総数

#### ② 達成精度(標準誤差率)

調査業種	売上高		
	平均(万円)	標準偏差	標準誤差率
興行場, 興行団	47,649	70,242	0.037

## 11. 公表

特定サービス産業実態調査の集計結果は、速報を調査実施から約11か月後に公表、確報を約15か月後に調査業種ごとに取りまとめ、公表する。

## 12. 統計表について

集計結果の統計表について、平成21年調査より標本抽出を導入したことにともない、事業従事者(又は常用雇用者)4

人以下の事業所を簡易票で調査を行う業種は、事業従事者数により集計事項が異なることから、集計結果の統計表については以下の構成とした。

・**全規模の部**

通常票、簡易票で調査している項目について集計する。

・**事業従事者(又は常用雇用者)5人以上の部**

通常票で調査している項目について集計する。

### 13. 平成 20 年調査結果との比較について

平成 21 年調査において標本調査の導入及び、未回収事業所の推計を行ったことから、過去の特定サービス産業実態調査との単純比較はできない。

## II 特定サービス産業実態調査の改正について

特定サービス産業実態調査は、昭和 48 年から調査を行っているが、平成 18 年調査から、サービス統計の整備・拡充を図るため、①調査対象名簿を業界団体等から総務省が実施した事業所・企業統計調査名簿へ変更(アクティビティベースから産業格付ベースへ変更)し、②調査業種の経年推移を的確に把握する観点から毎年調査を行うこととし、③調査対象業種の産業分類レベルについて、GDP 関連統計との連携を考慮し、また、調査対象名簿の基本情報である事業所・企業統計調査の産業格付との整合性を勘案して、日本標準産業分類小分類への統一を行った。

また、調査対象業種の拡充に伴う調査客体への負担増加、調査資源の配分問題に対応するため、平成 21 年調査から標本設計を導入した。

### 《調査内容の主な変更点》

(1) 調査対象事業所名簿の変更

調査対象事業所名簿については、平成 18 年調査から、これまでの業界団体等の名簿情報から事業所・企業統計調査の名簿情報に変更した(アクティビティベースから産業格付けベースに変更。)

(2) 調査周期の変更(同一調査業種の毎年調査化)

調査業種については、平成 17 年まで毎年調査業種(情報サービス業、物品賃貸業)、3 年周期調査業種(ビジネス支援産業、娯楽関連産業、教養・生活関連産業)として実施していたが、変化の激しいサービス産業を的確に把握するため平成 18 年調査実施以降は毎年調査としている。

(3) 調査対象業種の業種分類レベルの統一

調査対象業種の業種分類レベルについては、平成 17 年までは日本標準産業分類の中分類、小分類、細分類及び業務種類(アクティビティ)レベルで選定してきたが、調査結果の他の統計調査結果との利活用などを容易にするため、日本標準産業分類小分類(3 桁分類)に統一した。

(4) 標本調査の導入

調査客体への負担軽減、調査資源の効率化の観点から、母集団数が 1,000 以上の業種について、標本調査を行った(母集団数が 1,000 に満たない業種については、全数調査)。

## III. 興行場、興行団について

### 1. 調査対象の範囲

(1) **興行場、興行団の調査対象**は、以下の事業を営む事業所が調査の対象となる(国や地方公共団体等から施設の運営等を包括的に代行している指定管理者制度利用の事業所を含む)。

① 劇場

ア 演劇を提供する事業所(劇場)

イ 劇場(貸しホールを含む。)を賃貸する事業所

ウ 国・地方公共団体から劇場の管理・運営を委託されている事業所

※演劇の範囲:一般劇、歌劇(オペラ)、ミュージカル、歌舞伎、人形劇、舞踏、舞踊

## ②興行場

ア 音楽、落語、講談、浪曲、漫才、見世物、軽業(かるわざ)などの娯楽を提供する事業所(ライブハウス、興行場、寄席、演芸場、サーキット場など)

イ 野球、サッカー、ボクシング、相撲などの娯楽を提供する事業所(興行場、プロ野球興行用の野球場、プロサッカー興行用のサッカー場、ボクシング場など)

## ③劇団

ア 劇団、歌劇団など

イ フリーの俳優業、芸能プロダクション、コンサート・ツアー業など

## ④楽団、舞踊団

ア オーケストラ、舞踊団など

イ フリーの歌謡歌手業など

## ⑤演芸・スポーツ等興行団

ア 落語家業、講談師業、漫才業、見世物業、軽業(かるわざ)団など

イ プロ野球団、プロサッカー団、ボクシングジム、相撲部屋など

※「指定管理者制度」とは、国、地方公共団体や外郭団体に限定していた公の施設の管理・運営を、株式会社をはじめとした営利企業・財団法人・NPO 法人・市民グループなど法人その他の団体に包括的に代行させることができる制度。

なお、次のような業務を行う事業所は、本調査の対象としていない。

①競馬場、競輪場、オートレース場、競艇場

②主としてアマチュア競技を行うための陸上競技場、サッカー場、公営野球場、体育館など

③音楽教室、声楽家業

④主として飲食を提供するレストラン、バーなど

⑤人材派遣法に基づいて演奏家を派遣する事業所

⑥国や地方公共団体等の施設で、国や地方公共団体等が直接管理・運営を行っている施設(「市民ホール」等)

⑦会員のみを対象とする興行場、興行団

⑧興行を行っていないボクシングジム(健康、美容などの増進のためのジム)

## 2. 統計表の事項の説明

(1) **事業所数**は、調査結果(平成 21 年 11 月 1 日現在)の母集団数である。

事業所のうち、「**単独事業所**」とは、他の場所に同一経営の本社・本店や支社・支店、営業所などを持たない事業所。「**本社**」とは、他の場所に同一経営の支社・支店、営業所などがあり、それらのすべてを統括している本社・本店の事業所。「**支社**」とは、他の場所にある同一経営の本社・本店の統括を受けている支社・支店、営業所などの事業所。

なお、**該当事業所数**とは、当該項目に記載のあった事業所数をいい、事業所数の内数である。調査事項によっては複数の項目に記載している事業所が存在しているため、事業所数を「**該当事業所数**」で表記している。

(2) **経営組織別**は、法律の規定により法人格を認められて事業を営むものうち、株式会社、有限会社、合同会社、合資会社及び合名会社は「**会社**」、前記以外のは「**会社以外の法人・団体**」(外国に本社・本店がある外国の会社を含む。)である。また、「**個人経営**」は個人で事業を営んでいるものである(個人による共同経営の場合を含む。)

(3) **資本金額(又は出資金額)**は、平成 21 年 11 月 1 日現在で払込済みの資本金又は出資金の額。「**公的資本比率**」とは、(2) **経営組織別**で「**会社**」となる事業所の「**資本金額(又は出資金額)**」の中に、国又は地方公共団体等の公的機

関から出資等により組み込まれている金額。

(4) **事業所の形態**は、以下のとおり。

- ①「**興行場**」は、演劇、演奏、落語、講談、浪曲、見世物、軽業、野球、相撲などの娯楽を提供する事業所(興行場)、球場、劇場、ライブハウス、サーキット場、主として興行場を賃貸する事業所。
- ②「**劇団**」は、劇団、歌劇団、フリーの俳優、芸能プロダクション、声優プロダクションなど。
- ③「**コンサート・ツアー業**」は、音楽コンサート・ツアーの興行者。
- ④「**楽団、舞踊団**」は、楽団(独立のもの)、オーケストラ(独立のもの)、バンド(独立のもの)、舞踊団、バレエ団など。
- ⑤「**プロ野球球団**」は、日本野球機構、関西独立リーグなどに加盟しているプロ野球球団。
- ⑥「**プロサッカークラブ**」は、日本プロサッカーリーグなどに加盟しているプロサッカークラブ。
- ⑦「**その他の演芸・スポーツ興行団等**」は、寄席出演業、見世物業、曲芸・軽業(かるわざ)団、相撲、ボクシングジム、浪曲興行、プロレス協会、落語家業、音曲業、漫才業など、上記に該当しない興行団。

(5) **事業所の運営主体**は、劇場、ホールなどの興行場の運営主体。分類は以下のとおり。なお、劇場、ホールなどを持たない興行団は該当しない。

- ①「**自主運営**」は、自らが所有する又は、1年以上長期にわたる賃借を受けて運営している興行場。
- ②「**国・地方公共団体からの管理運営委託**」は、国・地方公共団体から運営を委託されている興行場。
- ③「**その他**」は、主として他に賃貸することを目的としている興行場。

(6) **従業者数**は、平成21年11月1日現在の数値。

- ①**従業者数**とは、事業所に所属している者で、当該業務(興行場、興行団業務をいう。)以外の業務の従業者及び、他の会社(企業)など別経営の事業所へ出向・派遣している者又は、下請けとして他の会社など別経営の事業所で働いている者(送出者)を含み、他の会社など別経営の事業所から出向・派遣されている者又は、下請けとして他の会社など別経営の事業所からきて働いている者(受入者)を含まない。

雇用形態別項目区分は、以下のとおりである。

ア **「個人業主(個人経営の事業主)及び無給の家族従業者」、「有給役員」、「常用雇用者」、「臨時雇用者」**

a **「個人業主(個人経営の事業主)及び無給の家族従業者」**のうち、**個人業主(個人経営の事業主)**とは、個人経営の事業主(共同経営者を含む。)で、実際にこの事業所に従事している者。**無給の家族従業者**とは、個人業主の家族で、賃金、給与を受けずに事業所の業務に常時従事している者。

b **「有給役員」**とは、経営組織が「会社」、「会社以外の法人・団体」の役員(常勤、非常勤を問わない)で報酬や給与を受けている者。

c **常用雇用者**とは、「一定の期間を定めずに雇用されている者、又は1か月を超える期間を定めて雇用されている者」又は「平成21年9月と10月にそれぞれ18日以上雇用されている者」で「一般に正社員、正職員と呼ばれている者」、「パート・アルバイトなど」に区分される。

・**「一般に正社員、正職員と呼ばれている人」**とは、常用雇用者のうち、一般に正社員、正職員と呼ばれている者。

・**「パート・アルバイトなど」**とは、「一般に正社員、正職員などと呼ばれている人」以外で「嘱託」、「パート」、「アルバイト」又はそれに近い名称で呼ばれている者。契約社員もここに含まれる。

・**「就業時間換算雇用者数」**とは、「パート・アルバイトなど」に記入した従業者全員の総労働時間(1週間分)を所定労働時間(1週間分)で除して算出した人数。

d **「臨時雇用者」**とは、常用雇用者以外の雇用者で、1か月以内の期間を定めて雇用されている者又は、日々雇用されている者。

イ **「総計のうち、別経営の事業所に派遣している人」**とは、事業所全体の従業者(2.(6))のうち、他の会社など別経営の事業所に出向・派遣している者又は、下請けとして他の会社など別経営の事業所で働いている者。

- ②**「総計のほか、別経営の事業所から派遣されている人」**とは、当該事業所に他の会社など別経営の事業所から出向・派遣されている者又は、下請けとして他の会社など別経営の事業所からきて働いている者(受入者)。



(7) **事業従事者数**は、平成 21 年 11 月 1 日現在の数値。

事業従事者数とは、事業所の従業者(2. (6))から「別経営の事業所に派遣している人」を除き、「別経営の事業所から派遣されている人」を含めた人数の計。

① **主たる業務(興行場, 興行団業務)の部門別事業従事者数**は、興行場, 興行団業務に従事する、下記の部門別の事業従事者数をいう。

ア **「管理・営業部門」**とは、一般に、総務、企画、人事、経理、予算及び営業などの業務に従事する者。

イ **「出札・案内」**とは、切符売場、場内案内などの業務に従事する者。

ウ **「制作・公演」**

・**「企画・渉外」**とは、自主公演又は提携公演のための企画や著作権処理などの渉外業務に従事する者

・**「選手・出演者」**とは、球団に所属する選手、コーチなどや、劇団に所属する俳優、舞台照明、音響等の舞台機構を操作している者

エ **「施設・機械」**とは、施設の管理、舞台機構以外の空調等の機械の運転などに従事する者。

オ **「その他」**とは、警備、清掃など上記以外の業務に従事する者。

② **「食堂・売店(直営)」**とは、興行場, 興行団業務ではなく、直営の食堂・売店の業務に従事する者。

③ **うち、別経営の事業所から派遣されている人**は、上記部門別事業従事者数のうち、他の会社など別経営の企業から出向・派遣されている者又は、下請けとして働いている者。

(8) **年間売上高**は、平成 20 年 11 月 1 日から平成 21 年 10 月 31 日までの1年間又は、調査日に最も近い決算日前の1年間に得た事業所全体の売上高及び業務別(「興行場, 興行団業務」及び「その他業務」)の売上高で、利益や所得ではなく経費を差し引く前の売上高(事業収入額)に消費税額を含めた金額。したがって、当該年間売上高には、営業として行っていない財産運用や財産売却による収入は含まない。

ただし、指定管理者制度により地方公共団体等から施設の運営等を包括的に代行している事業所の場合は、年間売上高には、入場料・興業収入又は賃貸収入の他に、地方公共団体等からの委託管理料を含める。

また、国、地方公共団体等の公的機関から補助金又は助成金を受けている企業、団体については、当該年度の補助金又は助成金を年間売上高に含める。

なお、当該年間売上高には、本社・支社(営業所)間及び支社(営業所)相互間の企業内取引によるサービス提供については、提供価格若しくは振替仕切額(提供価格若しくは振替仕切額がない場合は、そのサービス提供原価)を売上高としている。

(9) **収入種類別**の区分は、以下のとおり。

#### 〈興行の種類〉

① **「スポーツ」**は、プロ野球、プロサッカー、大相撲、プロボクシング、プロレスなど。

② **「演劇」**は、演劇、歌劇、歌舞伎、人形劇、ミュージカル、バレエ、日本舞踊、お芝居・歌謡ショー(二部構成)など。

③ **「演芸」**は、落語、漫才、講談、浪曲、見世物、軽業、曲芸など。

④ **「音楽」**は、各種音楽コンサート(ポピュラー音楽、クラシック音楽等)、演奏会、ディナーショーなど。

⑤ **「美術」**は、絵画展、展覧会、書道展、彫刻展など。

⑥ **「イベント」**は、感謝祭、運動会、諸集会、講演会、映画上映、各種催しなど。

⑦ **「その他」**は、上記に該当しないもの。

#### 〈収入の種類〉

① **「入場料・興行収入」**は、入場料収入、鑑賞料金などの収入。

② **「賃貸収入」**は、劇場等の興行施設の賃貸収入。

③ **「その他の収入」**は、ロイヤリティ収入、テレビ放映権収入、寄付・助成金及び補助金、広告料収入など。

(10) **その他の収入の内訳**は、(9) **収入種類別**の③ **「その他の収入」**の内訳。区分は以下のとおり。

① **「ロイヤリティ収入」**は、所属俳優等の肖像権収入、印税、興行場等の命名権収入など。

②「**テレビ放映権収入**」は、テレビ放映権収入、ラジオ放映権収入。

③「**寄付・助成金及び補助金**」は、企業、個人、団体、地方公共団体等からの寄付、助成金、補助金。

④「**広告料収入**」は、広告料による収入。

⑤「**その他**」は、芸能人の出演料収入等上記以外の収入。

(11) **年間入場者数**は、平成20年11月1日から平成21年10月31日までの1年間に主催した興行のうち、入場料を支払って入場した人数。

(12) **年間興行回数**は、平成20年11月1日から平成21年10月31日までの1年間に主催した興行のうち、入場料を徴収した興行の回数。

(13) **入場可能定員数**は、可動席を含めた観客席の標準的な席数。立ち見専用の観客スペースについては、標準的な収容人数を定員数に含める。ただし、通路、階段等は観客スペースから除く。

(14) **年間使用日数**は、平成20年11月1日から平成21年10月31日までの1年間に使用した劇場、ホールの使用日数。複数の劇場、ホール等の施設がある場合は、最も使用日数が多い日数を記入している。また、使用日数には、公演日以外の練習用として使用した日数、他の事業所へ賃貸した日数を含む。

(15) **年間営業費用**は、平成20年11月1日から平成21年10月31日までの1年間又は、調査日に最も近い決算日前の1年間の事業所全体の「給与支給総額」、「選手契約料・出演契約料」、「外注費」、「施設管理費」、「食堂・売店(直営)売上原価」、「広告宣伝費」、「減価償却費」、賃借料(「土地・建物」、「機械・装置」)及び「その他の営業費用」の計(消費税額を含む)。

①「**給与支給総額**」は、1年間に支給した給与額(基本給、賞与、諸手当等で定期的、臨時的に支払われたもの)及び退職金の総額(税込み)。

なお、営業費用から支払われる「役員」の報酬及び賞与、「パート・アルバイト等」、「臨時雇用者」の給与、当該事業所で主として給与を支払っている出向・派遣者(他の会社など別経営の事業所で働いている者)の給与を含む。

②「**選手契約料・出演契約料**」は、所属選手との契約料、出演者との出演契約料。

③「**外注費**」は、業務の一部又は全部を委託若しくは下請けなどの形式で外注した場合の費用で、この外注費には本社・支社・営業所間の同一企業内取引も含む。

④「**施設管理費**」は、興行場の施設管理に要した費用。施設管理を業務委託している場合には、「外注費」に含めないで「施設管理費」に含む。

⑤「**食堂・売店(直営)売上原価**」は、直営の食堂・売店の売上原価。なお、算出が困難な場合には、仕入高を売上原価とする。

(売上原価＝期首商品棚卸高＋当期商品仕入高－期末商品棚卸高)

⑥「**広告宣伝費**」は、ポスター、チラシ、テレビ用オンエアビデオテープ、プレゼント用グッズなどの広告宣伝費用(外注分、媒体支払い費を含む)。

⑦「**減価償却費**」は、取得価額が10万円以上の建物、機械・設備・装置などの償却費の額。

⑧**賃借料**は、「土地・建物」又は「機械・装置」を借りて業務を営んでいる場合の1年間の賃借料の額。

ア「**土地・建物**」は、土地・建物を借りて業務を営んでいる場合の、この1年間の賃借料。管理費などの共益費、月極駐車料金も含む。

イ「**機械・装置**」は、電算機やパソコンなどの「情報関連機器」、自動車などの「輸送用機器」、複写機などの「事務用機器」などの1年間の賃借料の額であり、「情報通信機器」と「その他」に分かれる。

・「**情報通信機器**」は、有線通信機器、無線通信機器、放送装置、自動交換装置、ファクシミリ、電子計算機(パソコン、サーバーなど)、端末機器、補助装置、電子計算機附属機器などの賃借料の額。

・「**その他**」は、自動車などの「輸送用機器」、複写機などの「事務用機器」など、情報通信機器以外の機械・装置の賃借料の額。

⑨「**その他の営業費用**」は、上記①～⑧以外の営業費用で以下のものである。

支払手数料、水道光熱費、旅費、交通費、通信費、仕入高(商品・原材料・部品などの仕入高)、土地・建物及び機械・装置以外の賃借料、派遣労務費、福利厚生費、租税公課など。

(16) **年間営業用固定資産取得額**は、事業所において平成20年11月1日から平成21年10月31日までの1年間又は、調査日に最も近い決算日前の1年間に取得した有形固定資産(「機械・設備・装置」、「土地」、「建物・その他の有形固定資産」)及び無形固定資産の額(消費税額を含む)。

- ①「**機械・設備・装置**」は、耐用年数1年以上で取得価額が10万円以上の情報通信機器、工具器具、機械、設備、装置、備品などの購入費用。
- ②「**土地**」は、土地の購入費用及び既存の土地整備に要した費用。
- ③「**建物・その他の有形固定資産**」は、建物の購入費用、改築・改装費用、給・排水及びガス設備、冷暖房設備などの建物付属設備の購入費用及びその他取得した有形固定資産の購入費用など。
- ④「**無形固定資産**」は、借地権、ソフトウェア、特許権、商標権、実用新案権、意匠権、電話加入権、営業権など物的な存在形態を持たない固定資産(法律的権利又は経済的権利)の購入に要した費用。

### 3. 記号及び注記

(1) この調査結果の概況及び統計表に使用している記号は以下のとおりである。

- ①「-」は該当数値なし、「0」は単位未満であることを表している。
- ②概況の「…」は、事業従事者4人以下の事業所(常用雇用者4人以下の企業)で調査していない項目を表している。
- ③統計表の「…」は、回収標本数が少ないために表章できない項目を表している。
- ④「不詳」は、欠測値の補完の際に、経営組織別、資本金額別、従業者規模別などの区分の格付情報が特定できない場合に区分している。
- ⑤「x」は、1又は2である事業所に関する数値で、これをそのまま掲げると個々の申告者の秘密が漏れるおそれがあるため数値を秘匿した箇所である。また、3以上の企業に関する数値であっても1又は2の企業の数値が合計との差引きで判明する箇所は、「x」で表した。

(2) 公表数値は、単位未満を四捨五入しているため、内訳の積み上げと合計が一致しない場合がある。

## IV. その他の注意事項

1. この統計表に掲載された**数値を他に転載する場合は、「経済産業省経済産業政策局調査統計部平成21年特定サービス産業実態調査報告書 興行場、興行団業編」**による旨を明記してください。
2. この統計表に関する質問は、下記宛にお願いします。

〒100-8902 東京都千代田区霞が関一丁目3番1号

経済産業省経済産業政策局調査統計部サービス統計室

電話 03(3501)1511(内線 2898)、03(3501)3892(ダイヤルイン)

統計アクセス用URL <http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/tokusabizi/index.html>

本統計表は再生紙を使用しております。